『秋田でなまはげに会う』　　６２回秋田わか杉国体剣道応援記

チームメイトや監督、コーチのおかげで徳島県少年男子剣道チームの一員として今年の秋田わか杉国体に息子の西田義玄が出場することになった。そのおかげで父親や母親も秋田でなまはげに会うことができた。そのおかげつながりの顛末をすこし書き残しておこうと思う。

剣道の国体四国ブロック大会少年の部の徳島男子が優勝、女子も準優勝して本大会出場を決めたのは、お盆すぎのまだ炎暑が続く頃だった。あれから一月あまり、残暑の納まる気配はないが、さすがに会場の東北秋田の男鹿半島にはもうおそらく秋が到来していることだろう。去年最下位に甘んじた徳島県は最下位脱出が今年の目標である。

２８日に飛行機と秋田新幹線を乗り継いで現地入りした選手団を追いかけて、少年男女剣道チームの私設徳島県応援団１４名も秋田に向かう。１２名はバスをチャーターして陸路を北へひた走り試合当日早朝に会場の男鹿市総合体育館に着く予定だ。我々は腰に持病をもつ嫁のために飛行機の切符を何とか手に入れて空路羽田経由で秋田入りを目指す。

２時過ぎの便で出発、宿はまだない。レンタカーは押さえてあるから見つからなければ車中泊を覚悟の旅路である。最後尾にちかいエンジンの隣が指定席で音がうるさい。曇り空の徳島空港を眼下に見下ろすまもなく飛行機は上昇し、こっちも雲上人になってしまった。爆音以外は快適なフライト。小雨の降る羽田に到着し、約２時間の待ち合わせで秋田行きに搭乗予定だ。

時間つぶしに展望台に登るがあいにくの天気で長居はできない。しかたなく喫茶店に入り、マフィンとジンジャーエールでおやつタイム。ここでめぼしいホテルに空室確認の電話。思いがけず最初のホテルでキャンセル空きが見つかった、ラッキー。野宿を免れてほっとした気分で秋田の地理の確認。とりあえずは上々の滑り出しである。

秋田行きもほぼ満席で飛び立つ。黒い闇の世界にときどき明かりが見える。発光性のビーズをまき散らしたような場所もあるし、置き忘れられたランプのようにぽつんと光る明かりもある。光りのネックレスのように見えるのは高速道路だろうか。
しばらくの間、光りと闇の芸術を楽しむ。嫁も身をのりだしてめったに見られない夜景を楽しんだようだ。アナウンスのあと、ぐっと機体が傾いて着陸体制に入る。いよいよ秋田に到着したのだ。

降りて行くジャージを着た乗客が国体関係者だとわかるのは、それぞれの県名が背中に

あしらわれているせいである。わか杉国体は今日の開会式を皮きりにいよいよ明日からはそれぞれの競技がはじまる。レンタカーの営業所は飛行場から８００mのところらしい。歩けない距離ではないが山の中の秋田空港の周囲は真っ暗である。軟弱な我々は当然客待ちのタクシーに声をかける。「すぐ近くなんですが、、」「でえじょうぶだ」。運転手の秋田弁度４（レベル５が最高）秋田弁を翻訳する間もなくマツダレンタカーに着く。店内に入ると朴訥そうなおじさんが待っていてくれた。名前を告げると書類を出してくれていろいろ説明してくれる。秋田弁度３。車はデミオのワンクラス下のブーンというリッターカー。確認のサインをしたらいざ出発。気分だけは未知の北極探検である。

ナビの案内にしたがって高速に乗る。注意標識に「クマ出没注意」とある。さすがに北国の風情だ。ナビの設定がうまくできないのでパーキングエリアに車を止めて予約したホテルを目的地に設定する。あとは案内指示に従い山あいを縫うようにして２０分くらいで秋田北インターに着いた。周囲に人家らしいものはない。はたして夕飯を食べるところはあるのかが気になるがしばらく走るとネオンがまばたく一帯にさしかかった。やれやれなんとか夕食にありつけそうだ。

地元の海産物が売物というううたい文句に惹かれて、やや高級そうな回転寿司屋に入る。土曜のせいかで５分ほど待たされたが、なんとか席につくことができた。めずらしいネタを中心に１０皿ずつ。しめて３６００円はまずまずの値打ではないだろうか？
あとはホテルについて寝るだけである。秋田市のやや北に位置する土崎という港町にあるホテルに着く。すぐ前にセリオンだかドラリオンだかの名前の高層ビルが建っていて金色の輝きが漆黒の日本海を照らしていた。

途中のコンビニで買い込むんだビールを一缶飲んで横になる。隣では嫁が高いびきだがなかなか眠れない。寝たり起きたりで朝を迎える。カーテンを開けると北国とは思えない明るく弾けた朝日が差し込んで来た。天気は快晴である。７時に朝食に降りて行く。国体関係者らしい人がちらほら。好物のポテトサラダをお代わりして腹ごしらえも完了。いよいよなまはげの里、男鹿半島に向かう。海浜道路は両側に松林が連なり快適なドライブコースである。左側にはおだやかな日本海が広がり、途中に設置された大きな発電用風車の羽根のむこうに男鹿半島が突き出している。

気になったのは信号機が縦型なこと。たぶん積雪を考慮した北国仕様なのだろうが
横に３つ連なった信号機しか見たことのない者にはちょっと違和感がある。最初は
うっかり赤信号に気付かずひやっとしたこともあったが、やがて慣れてきた。われわれもやっと北の旅人の仲間入りができたのだろうか？半島の入口にはロードサイドの量販店が並び、なまはげのモニュメントも建っている。会場はまもなくだ。男鹿半島では剣道の他にもセーリングやボクシングの競技が行われるらしい。すぎっちというキャラ

クターが描かれた大会の幟旗が沿道にはためいている。やがて車は予定どおり男鹿市の総合運動場脇の体育館に到着した。まだ８時すぎだというのに会場付近には続々と車や人が詰め掛けている。すこし離れた駐車場に車を止めたが、もうすでに満車状態である。ビデオカメラだけ持って会場までのあぜ道を歩く。黒い墓石がめずらしい。体育館の中に入るともう人で一杯である。バスで会場入りした徳島応援団を捜すが見つからない。そうこうするうち歓迎のショーが始まった。地元中学生による「なまはげ太鼓」である。（続く）